

対談冒頭近くで指摘しているとおり、笠井潔氏と桂秀実氏は、仮に「ストリート」に進級していれば1967年に大学に入学することになる、「同学年」の論客である。実際には笠井氏は高校中退などの曲折を経て68年に和光大学に、桂氏は高校卒業後の2年間の浪人生活を経て69年に学習院大学に入学し、それぞれに「68年革命」の日々を過ごすのだが、しかしその様相はまったく異質と違ってよい。

笠井氏は党派の、しかも指導者クラスの活動家だ。共産主義労働者党という、ベ平連にも大きな影響力を持っていた中堅党派の、学生組織の委員長だった。69年のうちに、新左翼論壇誌「情況」にも寄稿するヒトカドのイデオログとして活躍を始めていたようだ。

対して桂氏は、いわゆる「ノンセクト・ラジカル」、特定の党派に属さない一匹狼的な「個人過激派」の立場を貫いた。とはいえ、桂氏が実際に身を置いていたのは、当時大いに脚光を浴びた東大や日大の全共闘ではなく、実質7名ほどで担われていたという学習院全共闘であり、それなりに重要視されていた早大全共闘にも「ニセ早大生」として参加

していた、という程度の活動実績で、氏自身が対談の中で、「オレは笠井のような赫々たるキャリアも何もない、その他大勢」の周辺の活動家の一人にすぎ」なかつたと自嘲しているとおりでである。もちろん、世界的にも日本国内的にも「68年革命」の主役は桂氏のような有象無象の「ノンセクト・ラジカル」であつたこともまた確かだ。

笠井氏は72年の連合赤軍事件、とくにその「山岳ベース」での同志殺害の事実に衝撃を受け、他党派の起こした事件ではありながら、自身の党派においても何かの間違いで似たような展開は充分起こりうると考えて、ほどなく運動から身を引き、人類の解放を求める運動が常にその反対物へと転化してしまう謎を解き明かさねばならぬと、孤独な思索活動に入る。(必ずしも自派のものだけでなく) 諸運動・諸闘争の総体に対して責任を自覚しているべきではあろう党派指導者として、非常にまっとうな身の処し方であると思う。

対して桂氏は、同世代の活動家の多くが「連合赤軍事件」や「内ゲバ」(左翼陣営内部での暴力行使。ゲバルト＝暴力)にシヨックを受けたことが運動を離れた理由だと口を揃えることに何か欺瞞きまんのようなものを感じたのだろう、「だからオレはむしろ、そんなことにはシヨックを受けなかつた、ということにしようと思つて」、以後もさまざまの運動に関わり続けてきたと笑う。いかにもノンセクト活動家らしい「無責任」ぶりだが、これまた非

常に痛快な啖呵^{たんか}である。

私についていえば、両氏のふた回り下の世代に属する。68年には生まれてもおらず、連合赤軍事件の頃にはまだ1歳、何の記憶もない。80年代後半、当時のいわゆる「管理教育」の学校状況に反発し、高校生活動家となった。しばらく活動を続けていれば、自分がちよūdō生まれる前後の、つまり自分とギリギリ地続きであると感ぜられる時代に、脈絡はよく分からないが何かとても熱い出来事があったらしいことに、やがて気づかされるという世代でもある。村上龍がまさに私たち80年代後半の高校生を読者に想定して、自身の「高校全共闘」体験を書き綴^{つづ}ってくれてもいた。

遅くとも20歳になった90年までには、私は全共闘運動の後継者を自認するようになっていたが、笠井氏の熱烈なフォロワーとなるのはその少し後の91年のことである。以後2003年に獄中でファシズム転向を遂げるまでの十余年間、私は端的に「笠井主義者」であり続けた。当時すでに（小説を含めて）50冊以上あった氏の著作はほぼすべて読破していたし、単に読破するだけでなくすべて熟読しており、90年代半ばの時点で私はもう氏の語法・論法を通してしかモノを考えられないほど、完全なる笠井主義者と化していたように思う。

一方、絳氏の書くものに私が時々目を通すようになるのは、94年以降のことだ。私はいわゆる「ポリコレ」（ポリティカル・コレクトネス。「差別的表現」への過剰な規制）に反発して左翼運動シーンで孤立していたのだが、すでに91年ぐらいの時点で、ポリコレの起点にはどうも70年7月7日の「華青闘告発」が存在するようだと言星をつけていた。絳氏が「情況」94年2月号に寄せた論考「二重の闘争」をどういう成り行きだったか読んで、私の他にも「華青闘告発」に強くこだわっているらしい、しかも当事者世代の論客が存在することに驚いたのだ。

もちろん絳氏の名前は笠井氏の文章に時折「論敵」として登場していたし、したがって私はかなり度の強い色眼鏡をかけて絳氏の文章に接し始めたのだが、たまに読んでみるごとに、例えば小林よしのりの『ゴーマニズム宣言』についてもオウム事件についても「だめ連」などについても、ほとんど意見が一致してしまうことにかえって戸惑うことになる。時折直接お会いするような関係となるのは、絳氏とのほうが先である。絳氏には05年5月に、笠井氏にはだいたい遅れて11年9月に初めてお会いした。03年のファシズム転向の時点でもう「笠井主義者」ではなくなっていたということもあるが、先に絳氏とかなり頻繁に会って意見交換する関係になったためでもあるのか、この十余年は逆に、私はすっかり

「絳学徒」と化してしまっている。絳氏の初期の著作、とくに文学論の類いは私には難解でほとんど手に負えないのだが、『革命的な、あまりに革命的な』（作品社、2003年）や『1968年』（ちくま新書、2006年）を含む、94年以降の一連の「68年論」や、時評的論考については、かなり正確に絳氏の意図を理解している自信があり、かつほぼ完全に賛同してさえいるのである。

もちろん笠井氏の書くものにも、「笠井主義者」ではなくなって以降も私はずっと熟読的に目を通し続けているし、とくに時評的な文章には賛同しえない場合が増えつつも、さすがに十余年にわたって「完全なる笠井主義者」だったわけだし、理解できないということとはまずない。かつ、時評的論考というか要するに情勢認識的な部分についてはともかく、例えば両氏にとって最重要テーマの一つである「68年論」などについては、笠井氏の主張と絳氏の主張との間に、私はあまり齟齬を感じていなかったりもする。そもそも笠井氏の「68年論」にあらかじめ傾倒しまくっていないければ、絳氏の「68年論」に私はすぐさまピンとくることもできなかっただろう。

例えば両氏の吉本隆明に対する評価は、だいぶ異なっているような印象を持たれがちだ。つまり笠井氏は親吉本派であり絳氏は反吉本派であるように見える。しかしよくよく読ん

でみると、吉本について笠井氏は「功績7分、誤り3分」、桂氏は「功績3分、誤り7分」といっているという程度の違いだったりする。柄谷行人からたごうじんらポストモダン派の『戦後民主主義への転向』に関しても、両氏ともほぼ同様に批判的であり、単に、笠井氏は潔癖に柄谷らとの関係を断ちテッター批判の拳に及ぶのに対して、桂氏はあまり角が立たないようにテキトーにやり過ぎしているだけである。そして桂氏は笠井氏のような潔癖さに、いかにも党派の指導者然とした強張りこわばりを、笠井氏は桂氏のそのような加減さに、いかにもノンセクトにありがちな無責任さを嗅ぎ取って、要するに互いのキャラクターに反発し合っているだけではないのか……と、両氏にそれぞれ個別にお会いして交流を重ねることに、私には思われて仕方がなかったのである。

そして考えてみれば、それぞれ『68年革命』について繰り返しさまたまな角度から論じ続けてきた両氏が公開の場で議論を闘わせた形跡が、まして桂氏の『革命的な、あまりに革命的な』が刊行されて以降に一度もないというのは、あまりにも異常な事態ではないのか、とだんだん腹が立ってきた。おそらくは、編集者なども含めて、笠井氏の著作をフォロワーしている層と桂氏の著作をフォロワーしている層とがほとんど重なっていないためなのだろうと思うが、そもそも重なっていないこと自体が異常なのである。まあ初期の桂氏の

難解な、あまりに難解な文学論はともかく、両氏の著作の双方を熟読して、双方から多大な影響を受けてきた私が、司会役もテキスト起こしも全部引き受けるし、どうにかならないものかと拙著『全共闘以後』（イースト・プレス、2018年）の担当編集者だった藁谷浩一氏に提案して、実現したのが本書というわけだ。

ともかく私は今、ただただ「どうだ！」という気分である。